

## イノシシの正しい理解と管理の考え方について

江口祐輔

(農研機構近中四農研 上席研究員 究鳥獣害対策研究グループリーダー)

野生動物の管理を適正に行いたいのであれば、人間が野生動物を見る目を養い、野生動物への正しい理解のための冷静な判断と情報の取捨選択能力を身につける必要がある。

### 1) 生物学的な基礎知識

イノシシに対する誤解を解消することが正しい付き合い方への第一歩である。まず、過保護に生きている人間と、命は自分で守る野生動物との違いを把握し、動物目線で考えることが必要である。

イノシシの体重は何キロだろうか。動物は生まれてから日々成長し衰え、死んでいく。図鑑や書籍によってイノシシの体重は 100kg、80kg、60kg と様々な記載がある。最後まで成長しきる体重まで生き延びる個体が少ないので平均値が持つ意味はあまりない。

イノシシの食性は雑食性である。これまでに考えられてきた以上に植物に対する依存度が高く、葉も積極的に摂取する。味覚は甘味に対する嗜好性が高い。苦味に対する嗜好性は低いが個体差がある。辛みに対する嫌悪性は極めて低い。イノシシは農作物だけを狙って人里に出没しているわけではない。知らず知らずのうちに野生動物を誘引している環境を人間が整えていることにも気付かねばならない。餌付けや人慣れがイノシシの被害を引き起こす大きな要因である。たとえば、誰も収穫しなくなった果実が落ちてそのままになっていると、野生動物がそれを摂食し、その場所（人里）には嗜好性の高いものがあることを学習する。くず野菜などの放置も、餌付け行為になる（江口, 2003）。また、ひこばえや収穫残渣（キャベツや結球レタスの外葉の放置など）は、つつい野生動物の餌になっても見過ごす、あるいは許してしまう傾向にあるが、これは、野生動物にとって生存が厳しい冬期の栄養補給源となり、本来なら生存競争に負けてしまう個体を生かすことになる。また、イノシシは母親の摂食行動を学

習して餌の味を覚えるので集落依存の個体を作らないようにすることも重要である。

イノシシの色覚能力については、同じ偶蹄類のウシ（植竹ら, 1991）やヒツジ（Tanaka *et al.* 1989a, 1989b）などのヒトに近い色覚能力を有する動物とは異なり、青系（青・青紫と紫の一部）について明確に識別できるが、色が赤や黄緑に移行するにつれて無彩色との識別が難しいことがわかっている（Eguchi *et al.* 1997）。また、イノシシは試験終了後 6 ヶ月空白期間を設けても実験の手法をすべて記憶していた。彼らは学習した事柄を長期間保持することができることがわかっている。また、学習能力についても迷路試験においてウマやイヌと同等かそれ以上の能力を有することが分かっている（堂山 2011）。

イノシシの繁殖については、多産の特殊な例を大騒ぎする状況を見直すべきである。人間でも一卵性の四つ子の例や出産には至らなかったものの、排卵誘発剤を使わずに 12 子の同時妊娠例がある。これをもって人間の産子数を 12 人とは誰も言わない。イノシシの産子数において最大頭数で大騒ぎするのは繁殖についての正しい知識がないことを露呈するだけである。

イノシシの分布拡大が問題視されているが、とくに個体数が多くなったと指摘されているイノシシは元々受胎率が非常に高い。著者らは長年イノシシを飼育しているが、飼育環境下のイノシシに高栄養な管理を行なっても受胎率や産子数など、繁殖特性において野生個体との差はなかった（江口ら, 2001）。したがって、個体数の増加は死亡率の低下が大きな原因である可能性が極めて高い。本来自発的に頭数が減少する冬期の死亡率を人間の作る環境が下げていると考えてもおかしくない。子の死亡率は半年までに約50%と言われるが、‘農作物被害’や‘無意識な餌付け環境’によって死亡率は大幅に減少する。

多くの割合を休息にイノシシは年一産、産子数は 4-5 頭、栄養状態によって産子数は左右されない。出産時の生時体重は母親の栄養状態に影響を受ける。

繁殖に対する混乱の大きな原因は、直接イノシシの分娩行動を知る研究者が絶望的に少ないこと、出産日の子イノシシの観察経験や数百頭ものイノシシの飼育や、繁殖から死亡まで観察し続けた経験のある研究者も同様である。繁殖研究において出産日である基準値を持たずに推定で行われていることに問題がある。出産日が確実に特定されているイノシシの繁殖研究は我が国では 1、2 例にとどまっている。

## 2) 特定計画の基本

地域的に著しく増加している種の個体群、または地域的に著しく減少している種の個体群について個体数の管理や生息地の環境管理、等の目標及び方法を都道府県が定める計画（任意）

内容の多くが目標達成のための手段として「地域の実情に応じた必要な狩猟制限等の設定」、生息地環境の保全、生息環境の整備」「被害対策の実施」などが実施されている。

しかし、野生動物管理（Wildlife Management）との個体数管理と被害対策における捕獲が混同されており、策定された計画が必ずしも有効なものになっていない。

## 3) 特定計画の策定手法

イノシシの特定計画の目標は何か

被害軽減？個体数調整？それぞれに明確な根拠があるのか。

その根拠は、科学的に証明されているのか、実測値か？推定値か？

必要となるモニタリングの数値は実測値なのか？推定値なのか？

実測値と推定値を同じ土俵で議論するのは危険である。

実測値を求めるモニタリングは直接的に現場に関与できるが、推定値を求めるモニタリングの結果は推定値の精度を上げるために使われるべきものも多い。

## 4) 具体的な進め方

個体数密と被害の関係に関するモニタリング

自然食性及び林業被害と個体数密度との関係と、農作物被害と個体数密度の関係を同じ尺度で考察してはならない。農作物被害に関しては現場における被害対策の状況も加味して考察することで、新たな管理方法が見えてくる。

目的にあった捕獲の手法を明らかにするモニタリング

（必要のない捕獲をあぶり出すモニタリングでもある）

捕獲方法、捕獲努力量、捕獲個体の履歴、捕獲環境




---

---

---

---

---

---

---

---




---

---

---

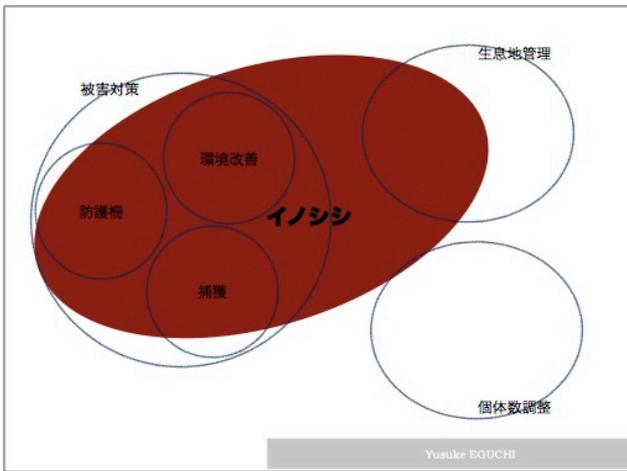
---

---

---

---

---




---

---

---

---

---

---

---

---




---

---

---

---

---

---

---

---